

2022年横浜ナザレン教会降誕節第二主日(1/2)礼拝
「聖霊と私たちの物語が始まる」使徒言行録第1章1節から5節

【聖書】

使徒言行録 1:1-2 テオフィロさま、わたしは先に第一巻を著して、イエスが行い、また教え始めてから、お選びになった使徒たちに聖霊を通して指図を与え、天に上げられた日までのすべてのことについて書き記しました。

3 イエスは苦難を受けたのち、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話されました。4 そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。5 ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼(バプテスマ)を授けられるからである。」

1 今、使徒言行録に聴く

今日から、2022年の主日礼拝が始まります。礼拝で聞く聖書の書物も新まり、使徒言行録となります。この物語は、作者が同じルカによる福音書の続編と言われています。ルカが、1節で「わたしは先に第一巻を著して」と言っている「第一巻」とは、ルカによる福音書のことです。

初代のイエスの弟子たちは、吹けば飛ぶような存在、直径1ミリにも満たない芥子種のようなです。人数も少なく貧しい人々でした。教養がある者も社会で高い地位にある者達もいない、指導者の中にさえ字が書ける者は少なかつたろう、と言われています。そして、彼らの周りは、敵だらけ。底が抜けたような貧しさ、小ささ、弱さの中に、彼らは身を寄せ合っていました。しかし、そんな彼らが、不思議なことに、敵ばかりの世界に向かって、イエス・キリストによりこの地上に始められた神の国を宣べ伝えて行くようになります。その様子を物語っているのが、使徒言行録です。まるで、この物語の中には、「小さな群れよ、恐れるな。あなたがたの父は喜んで神の国をくださる。」(ルカ福音書12:32)という主イエスの御声が響いているかのようです。

さて、皆さん、週報ボックスに配布したナザレン新報1月号をご覧になったでしょうか。2022年の最初に江上環理事長が記した巻頭言は、「献身者の減少、教職の引退の増加により、もう一人の牧師が一つの教会に仕える時代ではない。これからは一人の牧師が二、三の教会に仕える時代となるだろう」という厳しい現状です。日本の教会の、ナザレン教団の、横浜教会の、2022年は決して明るい見通しの中にあるわけではない事をひしひしと感じさせる年明けとなっています。古代世界に生きた教会と現代に生きる我々とは、直面している困難の性質が違いますから、単純には言えないかもしれませんが、自分達の貧しさや弱さのため息をつき、気力もなえそうになる点では、2000年前弟子たちと私達には相通じるものがあるのではないのでしょうか。だから、私達の教会が、使徒言行録から学ぶことは実に多

い、と思います。どれくらいかかるかわかりませんが、礼拝で皆さんと一緒に使徒言行録に聴いていくことを、私は楽しみにしています。この書物を読み終わる時、私達は一体どういふふうに変えられているのでしょうか、私達の教会はどう変えられているのでしょうか、わくわくする気持ちです。

2 聖霊を通して

さて、「使徒言行録」というタイトルの中にある、使徒とは、本来、「特別な任務を与えられ遣わされた者」という意味の言葉です。福音書では、主イエスが一晚中祈り、弟子たちの中から選んだ十二人のことを言います。いわゆる十二使徒。ルカは、この十二人にパウロとその仲間も加えて、使徒と呼んでいます。「使徒言行録」は、これら使徒たちを中心として展開していく物語。使徒達が主人公の物語のように見えます。

しかし、使徒言行録で一番大切なことは、使徒達がキリスト・イエスへの信仰に燃え、血と汗を流して頑張り、努力と忍耐を重ねてキリストを世界に伝えた、というサクセスストーリーではありません。人の手によるサクセスストーリーなら、本屋さんの店頭にうずたかく積み上げられている自己啓発本を読めばいいのです、聖書を開く必要はありません。

最も大切な事は、人間の努力や頑張り、才能を超える大きくて強い不可思議な力が、貧しさと弱さの中にあつた彼らを押し出すようにして、キリストと共に働かせた、という神の現実です。この不思議な働きをする力を、聖書では、御霊なる神、「聖霊」と呼んでいます。

既に、ルカ福音書に描かれている地上の主イエスの一生にも聖霊は、強く大きく働いておられます。主イエスは、聖霊の御力により母マリアの胎内に宿りました。ヨハネから洗礼を受けた後、天が開けて聖霊がイエスに降ります。主は聖霊に導かれ荒野に行き、四十日四十夜試練を受け、聖霊に満たされてガリラヤへと帰り、伝道を始められます。更に、使徒言行録1:2には、主イエスが「**聖霊を通して弟子たちに指図を与え**」とあります。主イエスは、父なる御神の御心を、聖霊の御力を通し、弟子たちに示していかれました。

使徒言行録を読んでみると分かる事ですが、最初の信仰者たちも、聖霊のみ力を受けキリストの証人としての働きを続けていきます。途中には、仲間割れ、言い争いもあります。孤独も病もあります。この世に受け入れられずに伝道に失敗したことも度々でした。ですが、父なる御神もキリスト・イエスも、決して彼らを見捨てない。その都度、その都度、使徒たちに、聖霊を通じて助けを与え続けました。迫害者たちによって裁きの場に引き出された者たちには、語るべき言葉が与えられました。伝道に失敗して意気消沈する者たちには、仲間の励ましを通じて、聖霊の慰めが注がれます。聖霊は、やめる者達には、イエスのみ名による癒しを使徒達を通じて与えてくださり、人生の様々な試練に葛藤する者達には、主イエスの道を指し示し、その道へと押し出してくださいませ。

使徒たちとその仲間も、この聖霊のみ力を無駄とせず、神の導きに応じて、自分達を変えていきました。使徒たちは、彼らを包む聖霊の中で、キリスト・イエスの証人として成長して

いきました。

このように生前の主イエスにも働かれ、使徒にも働く聖霊というお方、私たちには見えない御神ですから、様々に譬えられています。主イエスは、この方を「風」になぞらえて、次のように話しておられます。「**風は思いのままに吹く。あなたはその音を聞いても、それがどこから来て、どこへ行くか知らない。霊から生まれた者も皆そのとおりである。**」(ヨハネ福音書 3:8) 風に譬えられる聖霊は、しかし、私たちとは決定的に異なる御霊なる神、父なる御神、子なるキリスト・イエスと同じく、絶対的に自由で、人間を超えた力を持つお方です。私たち人間が自由にコントロールできる方ではありません。

だからこそ、使徒たちは、聖霊という御神の力の内に、世界中にイエス・キリストの福音を宣べ伝えることができたのです。彼らは、天の御神の御許から力強く吹いてきた風に背中を押されるようにして、イエス・キリストの証人としての道を歩み続けた、と言ってよいでしょう。ですから、使徒言行録は、「聖霊と使徒たちの物語」だと言えるのです

3 開かれた物語

しかし、その聖霊と使徒達の物語ですが、実にあっけなく終わります。その最後、第28章 31節は、こういうものです。「**パウロは、全く自由に何の妨げもなく、神の国を宣べ伝え、主イエス・キリストについて教え続けた。**」はっきりとした結末がない終わり方です。パウロをはじめ使徒達の最後は全く描かれていません。映画で言えば、「完」という字が出てくる結末ではなく、「to be continued」「続く」と出る終わり方、「まだ終わっていない、続編があるぞ」という最後です。作者であるルカは、「必ず、使徒言行録の続編が書かれ続けるだろう」と信じ筆をおいたことがうかがえます。

そして、実際に、使徒言行録の続編は、2000年間、名もない無数のキリスト者達によって書き続けられましたし、今も書き続けられています。この横浜ナザレン教会も例外ではありません、今日、この御堂に、そしてそれぞれの場所に集められて、復活の主イエス・キリストの十字架を見上げている私たち一人一人が聖霊なる御神と共に、神の民の物語の続編を書くようにと、招かれているのだと思います。私にはとても書けない、とは仰らないでください。何故なら、私達も又、使徒達に働いたのと同じ御霊なるみ神によって、イエス・キリストの十字架と復活に表された神の義、神の愛を示され、「イエスは私の神、私の救い主です」と告白する者達であるからです。

4 テオフィロ

ルカが「必ず使徒言行録の続きが描かれ続ける」と信じていたことは、冒頭の「**テオフィロさま**」という呼びかけからもうかがえます。原語ではもっと親しげな感じで、「テオフィロよ」と訳した方がよいような呼びかけです。このテオフィロという人物、その名前からローマ帝国の

貴族であったのは間違いがないようです。しかし、ルカが「テオフィロさま」と言う呼びかけで使徒言行録を始めたのは身分の高いローマ貴族のスポンサーに献げる言葉、と言う表面的な理由以上にもっと深いわけがあるのではないかと思います。

何故なら、テオフィロという名前には、「神のきょうだい」「神が愛する者」「神を愛する者」という意味があるからです。ルカは、使徒言行録の冒頭、ローマ貴族テオフィロへ献げる言葉の中に、「愛する神のきょうだいたちよ！」と親しく呼びかけ、使徒言行録の読者たちを聖霊と使徒たちの物語へと招きいれようとしたのではないかと、思われます。「これは、聖霊と使徒達の物語だが、神に愛され神を愛するあなた方の物語でもある。神のきょうだいたちよ、この物語に共に生き、この物語の新しい続きを描こうではないか！」ルカは、2000年後に使徒言行録の最初の頁を開いた私達にも呼び掛けています。

5 エルサレムを離れず

そのためには何から始めればいいのか。聖書の先を読みましょう。3節から5節です。「イエスは苦難を受けたのち、ご自分が生きていることを、数多くの証拠をもって使徒たちに示し、四十日にわたって彼らに現れ、神の国について話されました。そして、彼らと食事を共にしていたとき、こう命じられた。『エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。ヨハネは水で洗礼(バプテスマ)を授けたが、あなたがたは間もなく聖霊による洗礼(バプテスマ)を授けられるからである。』」

この段落は、来週もまた共に見ていくつもりなので、今日は3節について触れます。「苦難を受けた」とルカがさらっと書いているのは、言うまでもなく、ユダの裏切り、逮捕、拷問、そして十字架上の惨めな死、墓への葬りで終わる主イエス・キリストのご受難です。神の独生子、子なる神が、神の民の手によって殺される、人間が犯す最も深い罪を描いています。

しかし、三日後に、主イエスは甦らされます。そして、その後四十日間にわたって、弟子たちの前に度々現れました。「四十日に渡って」の四十という数字は、聖書では「相当に長い期間」を示す時に使われる数字です。主イエスは十分な時間をかけて使徒たちの前に度々現れ、ご自身が十字架の死から永遠の命へと甦らされて、今も生きて働いておられることを、彼らの心に刻まれました。そして仰います。「エルサレムを離れず、前にわたしから聞いた、父の約束されたものを待ちなさい。」

ルカは、エルサレムという都にこだわります。ルカ福音書は、エルサレム神殿で香をたく務めをしていた祭祀ザカリアの前に天使が現れる出来事から始まり、エルサレム神殿で賛美を献げる主の弟子たちの姿で終わりました。使徒たちの働きもエルサレムから始まります。それには理由があります。イスラエルの祖先・アブラハムに始まりイエス・キリストの十字架と復活によって頂点を迎えた神の救済の歴史は、主イエスの昇天で全く新しい局面を迎えます。今や、人間である使徒たちによって、世界中にイエス・キリストの福音が宣べ伝えられようとしています。これもまた、紛れもなく神の救いの計画の一部であるからこそ、エルサレム

から使徒達の宣教は始まります。

しかし、エルサレムは、弟子たちにとっては危険な町です。つい40日前、主イエスはエルサレムに於いて、十字架で惨殺されました。主を殺した張本人たちの本拠地がエルサレム。神の子を殺す神の民の都。そして大半の弟子たちは、十字架に苦悩する主イエスを置き去りにして逃げ去りました。なぜ、復活の主イエスは、弟子たちにとって辛い記憶の刻まれた危険な町であるエルサレムを、「離れずにいなさい」と仰るのでしょうか。そもそも、何故、天の御神は、救いのご計画の新しい歩みを、神の民が神からの救い主を殺すという最も深い罪を犯した街から始めようとするのでしょうか。

人間達の弱さ、愚かさ、醜さ、不信仰が、罪が、顕わにされた所にこそ、神の御力、神の恵みは、よりはっきりとより強く働く、そして全く新しい出来事が始まる、という事ではないかと思えます。自分や仲間の罪深さに、弱さに、愚かさに打ちひしがれるしかない時に、自分の力では立ち上がる事もできないような所で、十字架と復活の主イエス・キリストを想い起し、叫びをあげる。すると、何故か不可思議な風が強く激しく吹いてきて、彼らを包み、その風の中で、彼らは新しい人間へと造り変えられる、天のみ神のまったく新しい出来事、いまだかつて起こった事のないような出来事に参加し深い恵みに与る者へと変えられていく。だからこそ復活の主イエスは弟子たちに、「エルサレムを離れず」と仰ったのです。こうしてみても参りまして、使徒言行録という物語は、世界の深い闇と自分達の罪や弱さ、愚かさに呻く私達こそが、今、聞くべき物語なのだ、という想いが深くなりました。

2022年が始まりました。弟子たちが、神の救いのご計画に参加する事をエルサレムから始めたように、私達もまた、新しい年の新しい物語を、復活の主イエス・キリストの十字架のもとで、聖霊が与えられることを祈り願って始めたいと思います。甦りの主イエス・キリストによってこの地上に始まった神の国を、宣べ伝えて行くために。